



大阪南ブロック かんくう支部
(株) リノ 新家 徳子

17世紀ごろから庶民の衣料として取り入れてきた綿織物。なかでも泉州地域は有数の綿作地でした。この綿織物の技術と後藤又兵衛が当地に伝えたといわれる真田紐の技術がドッキングしたことで織物技術が向上、毛布のまち発展への礎になったようです。

泉大津で毛布が誕生したのは明治20年ごろ。その時の素材はなんと牛毛。最初は服地を作りましたが硬さとおいのために売れず、寝具に転換。やわらかな肌触りを求め悪戦苦闘し、起毛方法の開発、素材を綿にかえるなどの試行錯誤の結果、世界に誇る毛布産地を築いてきました。

しかし、現在毛布は耐久消費材としていきわたり、消費需要は飽和状態で、生産量の伸びは期待できません。

泉大津が毛布の町であることすら、地元住民にも知られなくなってきていました。そこで、地元企業が産地ブランド「OZU」を立ち上げたり、泉大津市がマスコットキャラクターや4人組羊バンドを誕生させたりしながら、泉大津のPR活動を精力的に行っています。



もう一つの主翼、ニット産業とともに、泉大津ブランドは進化しつづけます。

ウール、カシミア、シルク、綿、アクリル素材も加えて毛布の種類は多種多様。ネットで調べると、泉大津は日本で生産される毛布の90%のシェアを持つそうです。最近の家はエアコンで家中冷やす、暖めるといった文化生活になり、寒くて布団から出られないことが少なくなったかも。毛布の温みが郷愁を誘います。(編集西岡)